

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas  
January 15, 2012

へりくだって歩む

ミカ 6:1~8

6:1 さあ、主の言われることを聞け。立ち上がって、山々に訴え、丘々にあなたの声を聞かせよ。6:2 山々よ。聞け。主の訴えを。地の変わることはない基よ。主はその民を訴え、イスラエルと討論される。

6:3 わたしの民よ。わたしはあなたに何をしたか。どのようにしてあなたを煩わせたか。わたしに答えよ。

6:4 わたしはあなたをエジプトの地から上らせ、奴隷の家からあなたを買い戻し、あなたの前にモーセと、アロンと、ミリヤムを送った。

6:5 わたしの民よ。思い起こせ。モアブの王バラクが何をたくらんだか。ベオルの子バラムが彼に何と答えたか。シティムからギルガルまでに何があったか。それは主の正しいみわざを知るためであった。

6:6 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。

6:7 主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。

6:8 主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

エアフォースの士官が昇進して自分のオフィスを持つようになりました。彼のオフィスに新しいカーペットが入り、机が入り、椅子が入りました。この士官はこのオフィスにとっても満足し、自分を誇りに思いました。そのとき、彼の部下がやって

きました。彼は、部下にいい格好を見せようと、電話を取ってこう言いました。「はい。大統領閣下。わざわざお電話くださってありがとうございます。」おもむろに電話を置いてから、この士官は、部下に向かって言いました。「何の用事だい？」すると、部下がいました。「あの一、その電話はまだつながっていないのです。私は電話をつなげる工事に来たのですが…。」この士官は、とんだ恥をかいたわけです。聖書に「高慢は破滅に先立ち、謙遜は榮譽に先立つ」（箴言 18:12）とあるように、虚栄をはっても、何の良いこともありません。人は謙虚であることが一番です。

### 一、みせかけの謙遜

しかし、謙遜を身につけるのは、簡単なことではありません。ベンジャミン・フランクリンは、人生に必要な徳目を 13 あげました。「節制、沈黙、規律、決断、儉約、勉強、誠実、正義、中庸、清潔、平静、純潔、謙遜」です。彼は、自分であげた徳目を身につけようと努力し、ある程度はそれらを実践し、社会的に成功を収めたのですが、「謙遜は、最後まで身に着けることができなかつた」と言っています。

日本の文化では、自分をへりくだらせることは、当たり前のことで、それが礼儀のひとつになっています。時代が変わり、人々の意識も変わってきましたが、まだまだ、日本人の多くは「私のようなふつつかな者が…」「お粗末なものですが…」という言葉で口をします。しかし、それは言葉だけのことで、「卑下も自慢のうち」という言い回しがあるように、心の中では、それと逆のことを考えている場合もあります。人前で頭を下げていれば、損はしないし、失敗はしないというのです。「親の小言を聞く時にや、あたまさげてりやそれでよい」などという唄があります。しかし、それではほんとうの「謙遜」にはならず、謙遜は処世術の一つにすぎなくなります。

では、クリスチャンなら、「謙遜」をほんとうに理解し、身

に着けているのでしょうか。必ずしもそうとは言えません。よくあることですが、牧師が誰かに奉仕をお願いすると、「私のような者が、とてもそんなことはできません」という答えが返ってきます。そんなとき、もし牧師がその言葉に同意して、「そうですね。あなたは、この奉仕をするのにまだまだふさわしくありませんね」と言おうものなら、その牧師は、きっとその人に恨まれてしまうことでしょう。「私はふさわしくありません」という人の多くは、ほんとうにふさわしくなく思っているのではなく、体裁良く奉仕を断るためにそう言っているかもしれないのです。あるいは、「いいえ、あなたほどふさわしい人はいません。ぜひお願いします」と言ってもらいたいのかもしれません。有る人は、こういうことを指して、「それは謙遜的傲慢です」と言っていました。謙遜ぶることと、ほんとうに謙遜なこととは違います。

## 二、ほんとうの謙遜

では、「ほんとうの謙遜」とはどんなもののでしょうか。ギリシャ語では、「謙遜」ということばは、文字通りには「下に立つ」という意味です。誰の下に立つのでしょうか。神と、主イエス・キリストの下に立つのです。神は、すべてのものの主です。ですから、すべて造られたものは神の下に立つべきものです。ところが、悪魔、サタンは、自分が神の下にあることを良しとせず、神と等しくなろうとしました。そこに罪が生じました。最初の罪は「高慢」の罪だったのです。悪魔は、人間を自分の支配下に置こうとして、人間を同じ罪で誘惑しました。悪魔は、エバに「善悪を知る木」を取って食べるようそそのかし、こう言いました。「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」（創世記3:5）ここで「善悪を知る」というのは「何が善であり、何が悪であるかを定めることができる」という意味で語られています。しかし、

何が善であり、何が悪であるかを決定するのは神です。人は、神から善悪を教えられ、それに従って生きる存在です。このとき人は「もう、これからは、神に聞く必要はない。人間は自分で善悪を決めることができるのだ。あなたがたも『神のように』なるのだ。」と考え出したのです。この時以来、人間は自分で善悪を判断するようになりましたが、出発点が間違っているため、その判断はことごとく間違っただけとなりました。そして、間違っただけの判断を積み重ねながら、自分自身に、家族に、社会に惨めな結果をもたらしたのです。この人間の傲慢が解決されない限り、私たちはほんとうの謙遜を身につけることはできません。

ほんとうの謙遜は、神の前に罪を悔い改め、へりくだることから始まります。ところが人間は悔い改めるどころか、自分の正しさを主張し、へりくだるところか、ますますおごり高ぶるようになり、「高慢は破滅に先立つ」とあるように、おごり高ぶる人間が歩んでいるのは、滅びへの道です。しかし、神は、人を滅びへの道から連れ帰るため、イエス・キリストによって救いの道を開いてくださいました。高ぶる人間を救うため、神は、神の御子イエスを、低く、貧しく、卑しい者とされました。自分を正しいと主張する人々のために、神はキリストにすべての罪を負わせ、罪人とされました。滅びる人間を救うために、神は主イエスを十字架によって滅ぼしてしまわれたのです。ピリピ 2:6-8 に「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです」とある通りです。人間の罪は傲慢から始まりましたが、キリストは、そのへりくだり、謙遜によって、人間の傲慢を打ち砕き、人間をその罪から救ってくださったのです。ほんとうの謙遜とは、キリストのへりくだりの究極である十字架のもと

に来て、自分の一切の誇りを十字架の下に置き、十字架のもとにひれ伏すことなのです。

使徒パウロは、使徒たちの中で一番大きな働きをした人でした。彼には、その血筋において、家柄において、教育において、また、経歴において誇ることのできるものがいくつもありました。しかし、パウロは、そうしたものを、キリストの前では「塵あくた」（ピリピ 3:8）に過ぎないと言っています。「塵あくた」という言葉は「糞土」とも訳すことができます。彼の由緒正しい家柄も、最高の教育も、すこし汚い言葉になりますが、そんなものは「糞食らえ」と言って、すべてをキリストの足下に投げ出したのです。パウロは、自分を「使徒の中では最も小さい者」（コリント第一 15:9）と言い、「すべて聖徒たちのうちで一番小さな私」（エペソ 3:8）と言っています。そればかりか、「私はその罪人のかしらです」（テモテ第一 1:15）とさえ言っています。使徒たちや初代のクリスチャンたちは、このように、神の下に立つ謙遜を知っていました。

私は、アメリカに来て、何度かパッション・プレイ（受難劇）を見ました。パッション・プレイでいつも感動するのが、百人隊長が「本当に、この人は神の子であった。」と告白する場面です。パッション・プレイでは、百人隊長は、そのヘルメットを脱いで、十字架のもとに跪きます。私たちも、自分の頭にかぶっている、さまざまな誇りや栄誉を、すべて十字架のもとに捧げようではありませんか。すべてをもぎ取られ裸にされた主イエスの前で、私たちは、どんな誇りの衣をまとうのでしょうか。茨の冠をかぶせられた主イエスの前で、なおも、自分の冠にしがみつくののでしょうか。アイザック・ワッツの「十字架にかかりし」という賛美はこう歌っています。「十字架にかかりし 主イエスをあおげば 宝も誉れも あくたと等しき。恵みに報ゆる すべなきこの身は 身と霊ささげて ぬかずく 他なし。」この賛美のように、いつでも十字架のもとに身を置きたいと思います。

### 三、身に着いた謙遜

聖書は「みな互いに謙遜を身に着けなさい。」（ペテロ第一 5:3）と教えていますが、「身に着ける」というのは、アクセサリーとして飾りにする、寒くなった時にジャケットを羽織るといようなものでもありません。もし、そうなら、謙遜というのは、ほんとうの自分を隠すための手段になってしまいます。ペテロが「身に着けなさい」と言ったのは、人の目のあるところや、何か特別な時にあわてて謙遜を着込むというのではなく、普段着のようにいつも身につけ、自分の一部にすることを意味しています。聖書の他の箇所「あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて新しい人を着たのです」（コロサイ 3:9-10）とあるようなことを意味しています。

コロサイ 3:10 は「新しい人は、造り主のかたちに似せられますますます新しくされ、真の知識に至るのです」と続いています。「造り主のかたちに似せられて」とありますが、人間は、もともと神のかたちに造られ、神に似たものだったのです。神が持つておられる、愛やあわれみ、真実や正義など、神の豊かなご性質をもとから分け与えられていました。人間は「善悪を知る木から取って食べれば、神のようになることができる」という誘惑に乗ってしまいましたが、人はもともと神に似たものであって、そのような誘惑に乗る必要はなかったのです。人間は、その誘惑に乗ったために、かえって、もともとあった神のかたちを損なってしまいました。それで神は、そんな私たちの罪を赦すだけでなく、私たちを再び、神に似たものへと造り変えてくださろうとしておられるのです。「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着る」とは、新生とそれに続く成長という神の救いのみわざをさしています。「謙遜を身に着ける」というのは、「新しい人を着る」ことの一部分であって、それは、人間の力でできることではありません。しかし、そうありたいと願い、祈るとき、神は私たちのたましいに働き、私たちの内面に神のかたち、キリストの姿をかたちづくり、私たちを造り変えてくださ

るのです。

最後に、短いお話をして今朝のメッセージを終わります。南イタリヤの田舎に、地主の息子でマリオという少年と、アンセルモという、貧しい靴屋の息子がいました。二人は、境遇は違いましたが、大の仲良しでした。こどもの頃、誰もが話す話題ですが、アンセルモがマリオに、「将来何になりたいの?」と聞きました。マリオは「ぼくは、大勢の人々の前で話す、大説教家になりたい」と、目を輝かせて話しました。マリオがアンセルモに、「君は?」と聞くと、アンセルモは、それには答えず、「ぼくは、君が大説教家になれるように祈るよ」と言うだけでした。

やがて、マリオが修道院に入るために村を出て行く日がやってきました。家が貧しいために学校に行けなかったアンセルモは、村に残って、マリオのために祈っていましたが、数年してから、アンセルモも村を出て、マリオの修道院で召使いとして働くことになりました。

マリオが司祭になって、はじめて説教する日がやってきました。マリオは落ち着かず、廊下を行ったり来たりしていました。すると、召使いのアンセルモがそっと近づいてきて、「マリオ様、あなたのために祈っていますよ」とささやいて、通り過ぎました。それから説教壇に立ったマリオは、気持ちを落ち着けるために、深呼吸をしてから、大勢の人々を見渡しました。すると、教会の柱のかげで、祈っているアンセルモの姿が見えました。マリオの説教は、この日、人々に大きな感動を与え、次第に、マリオは、名説教家として人々に知られるようになりました。そして、マリオが説教するところにはどこにでも、アンセルモもいて、目立たないところでマリオのために祈っていました。

こうしてマリオにローマの大聖堂で説教する光栄が与えられました。幼い日から夢見たことがとうとう実現することになったのです。マリオは、今までしてきた名説教の中から、よりす

ぐりのものを選び、自信をもって、堂々と説教しました。マリオは、この日を境に、大説教家としての地位を不動のものにすることができるかと信じて疑いませんでした。

ところが、ローマの大聖堂での彼の説教は、弁舌はさわやかであっても、人々に何の感動も与えませんでした。マリオは自分の説教は完全に失敗だったと知りました。そして、その日、いつもいっしょにいるはずのアンセルモの姿が見えないことに気づきました。修道院長に尋ねると、アンセルモは、その日の朝、マリオのことを気遣いながら天に召されたとのことでした。

数日後、修道院の片隅にあるアンセルモの粗末な墓に、マリオの姿がありました。マリオはそこで熱心に祈っていました。修道院長が、マリオを見つけ、「マリオ司祭、あなたは再び前のような名説教が出来るように祈っているのですか」と聞きました。すると、マリオは振り返って、こう答えました。「いいえ、名説教家になりたいとは祈りませんでした。アンセルモのような謙遜さを身に着けたいと、祈っていたのです。」神が私たちに求めておられるもの、また、私たちが何よりも求めなければならないもの、それは「へりくだって神とともに歩む」ことです。そのとき、私たちの人生は、その内側から、神の力によって大きく変わっていくのです。

### （祈り）

父なる神さま、人間の傲慢から始まった罪を解決するため、キリストはへりくだった姿で、人間のもとに来られました。キリストのへりくだりが私たちに救ってくださるのです。ですから、私たちもへりくだることなしに、この救いを得ることはできません。どうぞ、私たちにほんとうの謙遜を与えてください。それを身につけ、それによってあなたに仕え、互いに支え合う私たちとしてください。「わたしは心優しく、へりくだっている」と言われた、主イエスのお名前です。